俺の彼女がHなお店で
働いていた件について
彼氏以外の男と
やりまくり♡
さらに
ヒロイン三人追加！
主人公視点でストーリーが進む寝取られCG集

オレの　名前は真中淳平

オレは今　大人の街

夜の繁華街に来ている…

周りを見回すと

おっパブ…　ピンサロ…　ソープ等の

風俗店ばかりだ…

ちなみにオレは別に　ここに遊びに

来た訳ではない

では　なぜこんな所へわざわざ足を

運んだのかと言うと

実は数日前に、友人からある信じられない

話を聞いたのだ

それは　オレの彼女である

西野つかさが　『いちご　120%』という

風俗店で働いているというのだ

そんな話信じられる筈がない…

しかし　火のないところに煙は立たず

オレは真相を確かめるべく

帽子　サングラス　マスクを装着し

その噂の店へと急いだ…

「いちご120%…　ここだ…」
どくん　どくん
「お　大人の店に入るのは
人生初…
やべ　緊張する…」
「くそ…　中々　一歩が
踏み出せん…っ」
「こ　ここまで来て
ビビッてどうするっ」
「えぇいっ　行ってしまえ！」
俺は思い切って店内へと
足を踏み入れた…

この店では　初回のみ見学OK
というシステムだったので
ボーイにそれを伝えると
店の奥にある見学用のテーブル席
へと案内された…

ソファに腰を下ろすと
俺はさっそく　店内を見回し
西野の姿を探した…

「な…っ！」
俺は我が目を疑った
な　なんと西野が本当にいるではないか…っ
しかも　俺のすぐ目の前にぃ…っ！
西野は俺だと　気づいていないようだ…　変装しておいてよかった…
西野は客の男の　太ももの上に座り
何やら話をしている…
く…っ　男の手が　西野の肩と手と太ももにぃ…っ！
俺はすぐにでも　男に殴りかかりたかったが
西野のあの楽しげな顔をみて　動く事ができなかった…

男の顔がぐっと西野に近づく
ち　近い　近い～
何で西野は　全然離れようとしないんだよぉ

あれ…？
何か西野…
切ない表情してない…？
これって　まさか…

西野がそっと瞳を閉じて
軽く唇をつきだした…
おっ　おいおい何やってんだよ西野ぉっ！
っそ　そんな野郎とキスするつもりなのかぁっ！
ふっ　ふりだけ　ふりだけだよなぁ…っ！

二人の唇の距離が
どんどん縮まっていく…
だめだっ！
おいっ　西野よせ…っ
やめろぉ…っ！

俺の願いもむなしく
二人の唇は重なってしまった…
「そ　そんな…
に　西野…　どうしてそんな奴なんかと…」
俺は　頭が真っ白になった…
「あ　あの西野が…　俺以外の男とキスするなんて…」

西野の舌と　男の舌が
いやらしく絡まりあう
そ　そんな　キス…
どこで覚えたんだよ…
レロ
レロ
俺はあんなキスは　一度も西野とした事はない…
ということは
他の男とのキスで覚えたということになる…
西野は　一体いつから
この店で働いているんだろう…
そして　一日に何人の客を相手にしているんだろう…
考えただけで　気が重く　遠くなる…

西野と男は
もう一度唇を重ねた…

今度は　口の中で
絡ませ合わせているようだ
西野の甘い声が　微かに漏れているのが聞こえる…

ん…

んん…

お互いの唾液が混ざり合い
いやらしい音を立てている…
チュル
チュル
他の男とのキスに夢中になっている
今の西野の頭の中に
僕　真中淳平は存在しているんだろうか…

ん…？
二人が離れた…
どうやら　キスが終わったようだ…

僕は　これで西野の接客サービスが　終わったと
安堵していると…

西野が男の前に　膝を抱える格好で
チョコンと座り込んだ

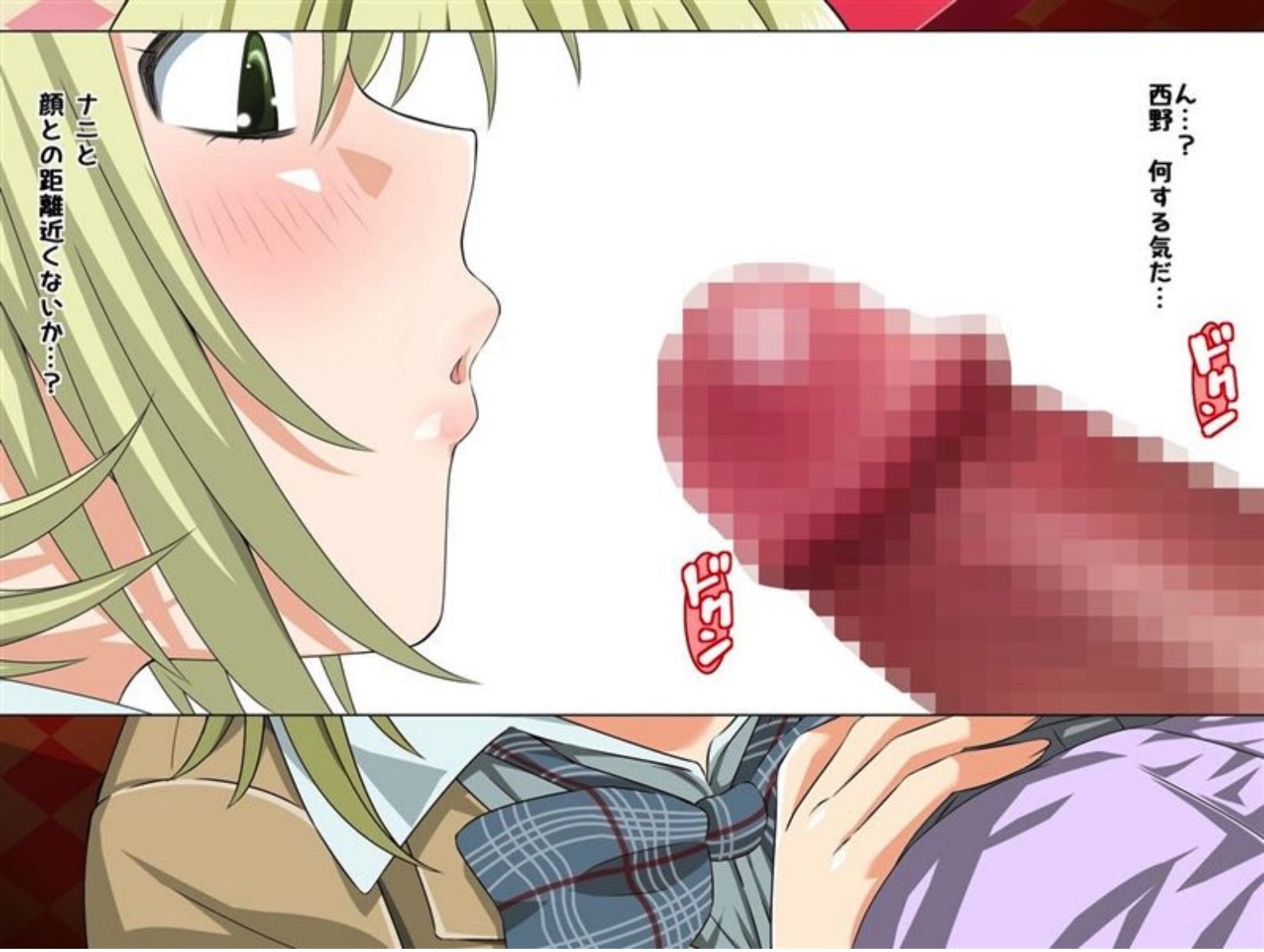
男の股間が
ちょうど西野の顔の高さにある…
西野は　ワクワクした表情で
男の股間辺りをみつめている…
な　何だ…？
何が始まるんだ…？
だ　誰かこの店のシステムを　教えてくれ…っ！

何か男の股間が　膨らみ始めた様に見える…
そして…　その膨らみは大きくなり
ついには　完全に勃起したようだ
ムクムク
あ　あいつ…っ　西野の目の前で
何　勃たせてやがる…っ！
西野は　そういう品性の無い男は大嫌いなんだ
さぁ　西野っ　こんな店とっとと出ていくんだっ！
ビクン
ビクン
しかし　西野は　男の股間を
みつめながら目を輝かせている…

西野が男の股間を
まさぐり始めた
にっ　西野…っ
っど　どこ触って…っ！
さわ
さわ

「！」
突然　とんでもないサイズのナニが
姿を現した…っ
な…っ　にっ　西野が　ファスナーを
下ろしたのか…っ！
ドク
ドクン
ドクン

西野は躊躇なく
男のナニに触れ　笑みを浮かべている…
ナデ
ナデ
俺とのHの時　俺のナニを見るだけでも　赤面してしまうぐらい
清純なあの西野が…っ
うっとりした顔を浮かべながら
他の男のナニを撫でまわしている…


ん…？
西野　何する気だ…
ドクン！
ドクン！
ナニと
顔との距離近くないか…？

「え」
チュッ♡
ビクッ!
ビクッ!
にっ
西野が
ナニと
キッ
キス
してるぅ…っ!

西野は　そのまま
男のナニを咥えこんだ
ジュププイプ…
俺は
この目の前の光景が只々
信じられなかった…

西野の口が　もごもごと
動いている
もご
もご
おそらく　口の中では
亀頭を　舐め回しているのだろう…

今度はさらに奥まで　ゆっくり
咥えこんでいく
ジュププ…
ジュプ

西野の動きが激しくなる
ジュブッ！ ジュブッ！
大きな音をたてながら
ひたすら しゃぶり続ける
ジュブッ
ジュブッ
ジュブッ

ジュプッ！ ジュプッ！
より一層激しくなるっ
強い刺激を与え 射精させるつもりなのだ
ジュプッ
ジュプッ
ジュプッ
ジュプッ
ジュプッ
ジュプッ

男は　大きくビクッビクンっと
体を震わせながら　西野の口内で
その欲望の塊を発射させた
ドプッ
ビクッ
ビクン

西野は
口の中たっぷりの
精液を飲み込んでいる
ゴクッ　ゴクッ
まるで牛乳でも飲んでいるかのようだ
ゴクッ
ゴクッ
ゴクッ

ぷはぁ
精液まみれの　ナニを
満足気な表情で　みつめている…
ビクン
ビクン
ビクン
はぁ
はぁ
彼氏である俺ですら　してもらった事ないのに
今日知り合ったばかりの男に
こんなHな奉仕をするなんて…
西野…
一体どうしてしまったんだ…

男が何か
西野に要求しているようだ…

ヲギ…

西野は　コクンと頷くと
ブレザーを脱ぎ始めた…

何か嫌な予感がする…

Yシャツ姿になった西野は
男と向き合っている…
男の舐めまわすような視線は
西野の胸元へと向けられている…
プチ
プチ
ちっ　あの男
西野の身体見てんじゃねーよ
西野の手は　胸元で
何やらごそごそと動いている…

ぴらっ
西野は Yシャツのボタンを外し
胸元を開いてみせた
ぽろん
西野のおっぱいが ぷるるんと揺れながら
姿をあらわした
ぷるるん
「にっ 西野…っ な…っ 何やって……っ」
俺の… 俺だけの西野の身体が…
ほ…他の男に見られている…
しかも 周りには 他にも客がいるのだ…
っまりそいつらにも 西野の裸が見られて…
く くそぉ…っ
俺は もう気が気ではなくなっていた

男は自慢のナニを西野のおっぱいに
あてがり　ほおずりしている
ちくしょう…
あの　野郎っ　汚ねぇもん西野に擦り付けてんじゃねぇよ…っ
西野はあんな事は　絶対嫌がるんだ…っ
ほら見ろ　あの西野の嫌そうな…
ズリ
ズリ
ドクン
ドクン
西野は　嫌がるどころか　嬉しそうな表情を浮かべ
さらには西野の方から　積極的に当てているようにもみえる…
「……くっ♥」

ぱふっ
男のナニは 西野の柔らかいおっぱいに
挟まれた
ぱふっ
あぁ… 一体西野はどこまで
奉仕するつもりなのだろう…
も もう これ以上は勘弁してくれ…
お願いだ…

西野はおっぱいを　交互に動かし
男のナニを刺激している
プニ
プニュ
男はよほど気持ちいいのか　数回擦られただけで
先走り汁が　溢れている
ムニュ

西野は高速で　しごき始めた
男の膝がガクガクと震え　顔は恍惚の表情を浮かべている
西野にとって　男をいかせる事など
造作も無いのだろう…
俺の知らないところで　一体何人の男をいかせてきたのか…
ムニュ
プニ
ムニュ
プニ
プニュ
プニュ

男は　あえなく数分で
射精してしまった
ドプッ
俺だったら―あんなに　激しく擦られたら
一分と持たないだろう…
我ながら情けない…

男は　西野の顔面めがけて
容赦なく　射精を続けている
そして　それを西野は　全く嫌がる素振りもみせずに浴びている
ドピュッ
ビュル
ビュッビュッ
ビクンッ
ビクンッ
何で　西野は全然嫌がらないんだよ
どうして　そんなに嬉しそうなんだ…

西野は　男をいかせて満足したのか
恍惚の表情を浮かべている
はあ
はあ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
く…　西野の身体が
奴の精液で汚されていく…っ

男が　西野に何かを促している…

西野は　小さく頷くと
Tシャツを脱ぎ始めた

お　おいおい…っ
上半身　完全に裸じゃないか…
なっ　何をするつもりだ…っ

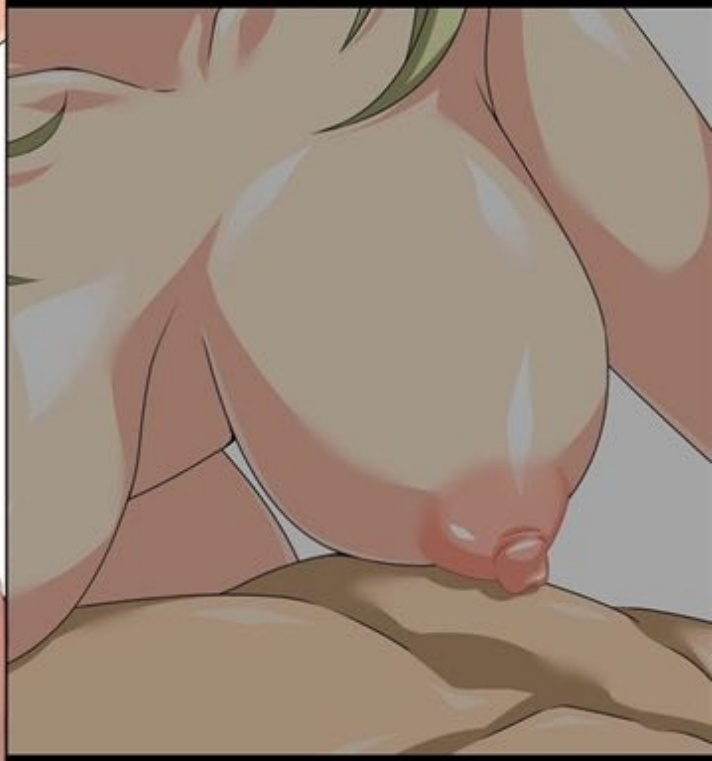
続いて西野は　スカートを脱ぎ始めた
ぷるんっ♡
に　西野…っ
そっ　それだけはだめだぁっ　やっ　止めるんだぁっ！

男の上にまたがり　乳首を擦りつけている

西野は気持ちがいいのか　吐息が漏れているのが聞こえる

西野は　男のナニを
ぎゅっと握った

ぎゅっ



ぷりん
ああ…っ!
あっ　あんなに　身体を密着させて…っ
し　しかもっ　西野が今　身につけているのは
い　いちごパンツ一枚だけ…っ
あ　あんな格好で
いつも客の相手をしているのか…?
ほとんど　全裸じゃないか…
ぷにぷ
むにゅ
ぷにぷ

そんな俺の気持ちをよそに
西野は手こきのスピードを上げる

それは
あまりに慣れた手つきであった
明らかに ここ2、3日で身に付けた
モノではない…

数週間…
いや数か月…？

ぷるっ

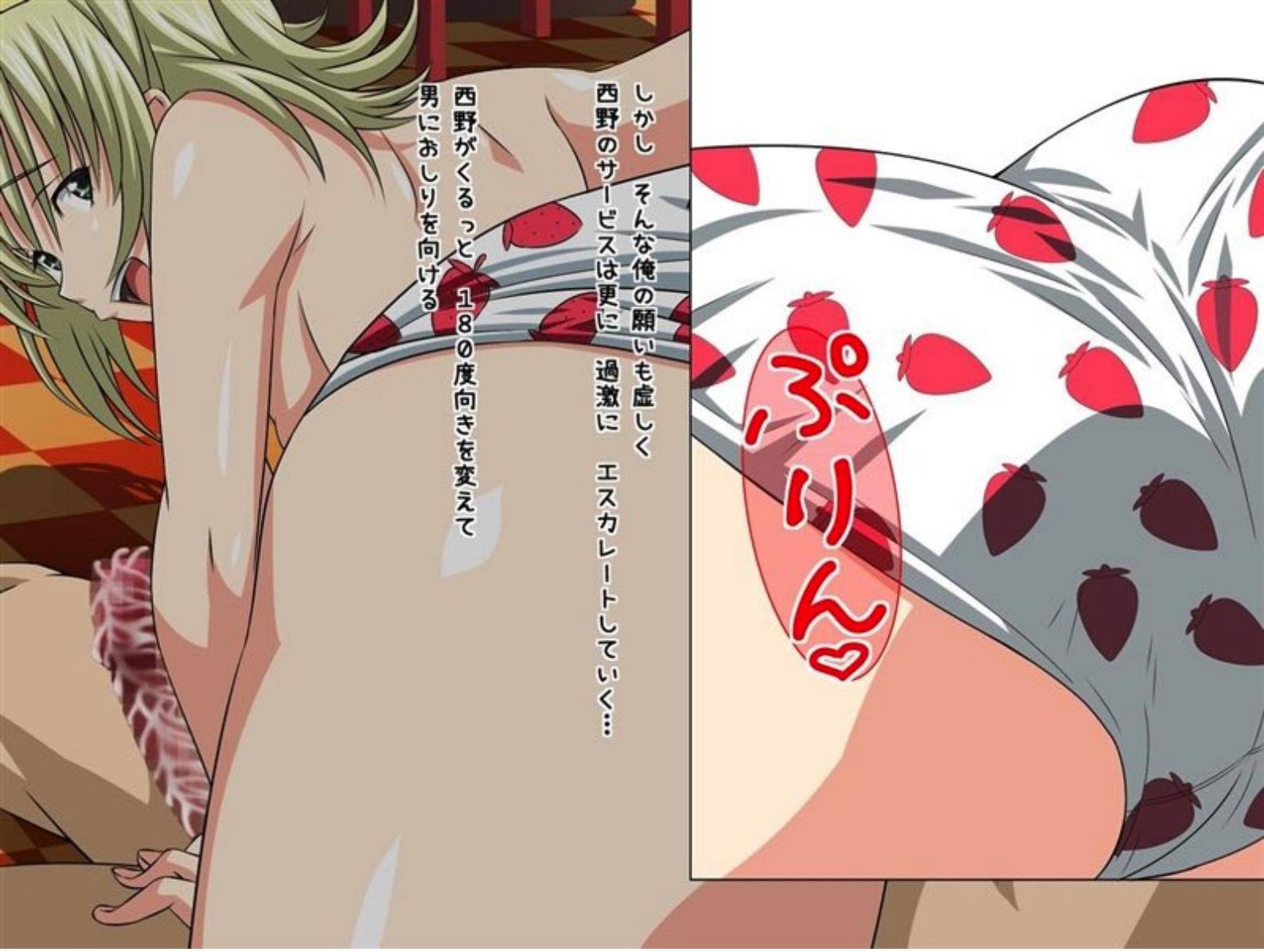
ぷるんっ

おいおい…
に
西野が
これまでに相手に
してきた男の数って…
さ 三桁 超えてるんじゃ…

ニチュッ

ニチュッ

あっ…あの男…もう射精してやがる…
西野の…手こきはよほど上手いようだが
彼氏である俺が…当然…喜べる筈もなく
俺は一刻も早く…この地獄の時間が
過ぎ去る事を願っていた…
ドピュッ
ビクッ
ビクッ


ぷりん♡
しかし　そんな俺の願いも虚しく
西野のサービスは更に　過激に　エスカレートしていく…
西野がくるっと　180度向きを変えて
男におしりを向ける

そして　女の子の
大切な所を　ぱくぅっと
ひらいてみせた

くぱぁ

……っつ！
俺は　ズドンっと　頭を
強く殴られた様な衝撃を受けた…っ
そこは　そこだけは
彼氏である　俺だけに許される
領域であるはず…
そんなぁ……
に　西野ぉ…　もう　止めてくれぇ…

ッー♥

男が　西野の大切な
場所を舐め始めた

あの野郎…っ！
俺は殴りかかろうと
男に　近づいた…っ

しかし　西野の方から
催促したのだ…っ
それって　男にしてほしいって
事なんじゃ…
そんな　考えが頭をよぎり
俺は　立ち止まってしまった…

俺の位置から　西野達は
ほんのわずかな距離にいる…
それこそ　手を伸ばせば届く距離に…
ビクンッ
ビクンッ
れろ
れろ
男に　刺激され
西野のあそこから　愛液が
溢れているのがみえる
え…っ
女の子って
好きな男以外には
感じないんじゃ…

西野が「あっ あっ」っと
いやらしくも それでいて
可愛いらしい声をあげる
っと 間もなく
西野の絶叫と共に
ものすごい勢いで
愛液が溢れ出した…っ
あんな 愛液の量…始めてみる…
こ これって
に 西野…
いっちまったって事…？
お 俺以外の男に
い いかされてしまったのか…？
い いや…
そんな筈は無い…
だ だって俺ですら
まだ 西野をいかせた事が
ないのだから…
プシュッ
ビクンッ
ビクンッ

…っう!!
西野が突然 俺の身体に
もたれかかってきた…っ
どっ どうしよう…っ
西野は 俺だと気づいて
いないようだけど…
西野は 潤んだ瞳で 俺を
みつめている…

西野はゆっくりと
腰を突き上げだした…
…？
な　何だ…？
どうゆう意味だ…？
俺は　どうしていいのか
分からず
戸惑っていると…

男が　西野の背後から現れ
おしりに手を当てた…
その瞬間―俺は
この先の出来事を察した

男は今まで以上に　硬く
巨大に膨張した　自慢のナニを西野の
おしりに擦りつける
スリ
スリ
西野はそれに　びくんっと
反応する…
「や…　止め…　止め…」
声が　喉の奥の方でひっかかり
言葉にならない…

男はナニを西野のアソコの当てた
西野は「あぁ…っ」っと
切ない声をあげる
ビク
ビクン
ブチュ
「く…っ!
よっ よせ…っ
やっ 止めろぉぉ…っ!」
俺は心の中で
思い切り叫んだ…っ!

しかし　俺の心の声など　届く訳も無く…
ビクッ
「あぁぁ…っ♥」
西野はヒクヒクと痙攣を起こしながら
大きな声をあげた…っ
ビクッ
あぁ…　そんなぁ…
嘘だろぉ…
どうしてこんな事に…
西野ぉ……
ズリュ
ズリュリュ…
西野は　とうとう
越えてしまったのだ…
禁断の壁を……

男は　感触を楽しむ間も入れずに
激しく腰を動かし
ナニを西野の中で擦りまくっている

ぷるっ♡

「あぁんっ　あぁぁんっ」
おっぱいを　ぷるんぷるん
揺らしながら
西野は男に突かれる度に
声をあげる

ぷるんっ♡

…くっ！
あ　ああ　あの野郎…っ
俺の西野になんて事を…っ！

ズチュッ

男は西野を　ただの性処理の道具
としかみていなかった
西野の反応など全く気にする事無く
自分の快楽のためだけに　情け容赦なく
腰を振り続けていた

ブチュッ

ブチュッ

「おっ　おいおい…っ
いつまで　挿入しているつもりだ…っ
あ　あいつ　まっ　まさか…っ」
男の動きは　次第に
激しくなっていき
苦悶の表情を浮かべる西野
そして　とうとう…
ビクッ
ビクンッ
ドプッ
どびゅうぅっ♥
「なっ　ななっ　膣内出し
しやがったああぁ…っ♥」

ズルリ…
ナニが西野のアソコから 引き抜かれる…
ビク…
はあ
大量の精液が あちらこちらに
飛びちっている…
そして 西野の膣内にも…
ビク…
はあ
ビク…
き きき 今日って
に 西野…
たしか あ ああ… 安全日じゃ…
なな なかった… ような…
ビク…
俺は この現実離れした
光景を目の前に
立ったまま気を失いかけていた…

あれ…？
どこだここ…
真っ白な空間…
ひょっとして　夢の中…？
なんだ…
さっきまでのは全て夢だったのか
よかったぁ
俺は心の底から安堵した…
女の子の声が聞こえる…
これは…
どこか聞いた事のあるような……
……
そうだ
この声は西野の声だ…
俺は目を開けた

女の子が　男の膝の上に乗り
自ら腰を振っている
二人の身体はぴったり
密着し　完全に一つになっていた
それは何とも言えないエロさがあった
どんな女の子なのかと
顔を覗くと…

「！」
それは西野であった
やはり　さっきまでのは夢ではなく
現実だったのだ…
ブチュ
ブチュッ
ブチュッ
西野は　快楽に身を委ねるように
男のナニを　自分のアソコに
挿入し腰を振っている

西野のあんな表情を
俺は見たことがない…
俺の倍近くもある ナニを咥えこんで
喜ぶ西野…
それをみて
俺はようやく理解した…
西野… 今まで 俺のじゃ満足できていなかったんだ…
きっと俺とHする度に
フラストレーションが溜まっていたに違いない…
そして その欲求を満たすために こんな店に…
西野は何も悪くない…
悪いのは俺だ…
ビクッ
ビクッ
ブチュッ
ズリュッ
ズチュッ

西野は　目を閉じ
男とのHに夢中になっていた…
今の西野の頭の中には　俺の存在など
欠片もないだろう…
あるのは　男のナニの事だけ…
西野はこの巨根欲しさに　男に
フェラやパイずりのサービスをしていたのだろう…
ビクン
ビクン
ぷるん♡
ぷるん♡
ブチュッ
ブチュッ
ブチュッ

男の腰が動き始めた
西野の身体が大きく上下にはねあがる
俺には もうどうする事もできない…
西野が満足するまで
じっと我慢するしかなかった…
ぷるるん♡
ビクッ
ビクッ
ブチュッ
ブチュッ
ブチュッ
ブチュッ
「ああっ あぁんっ
いいっ 気持ちいいのっ♡」
「もっとぉ もっとしてぇっ♡」
西野が男に おねだりしている
やっぱり 俺のじゃダメなんだ…

「あぁぁっ♡ すごぉいぃぃ♡
「こんなのぉ 私ぃ はじめてぇぇ♡」
「奥にぃぃぃ 届いちゃってるのぉぉっ♡」
ぷるるん♡
ビクンッ
ビクンッ
ブチュッ
ドチュッ
ズチュッ
ブチュッ
「いいっ いいよぉっ♡ 気持ちいいよぉぉっ♡」
「極太おちんちん 気持ちよすぎるうううっ♡」

「もうう いっちゃうううう
私いい いっちゃうよおぉぉっ♡」
「いく いく いくううう♡
あああああああっっ♡♡」
ドピュッ
ビクッ
ビクンッ
ビクッ
ビュビュッ
ビュクッ
ビクンッ
西野は ホール中に響きわたるほどの
声をあげ
そして 絶頂に達した…
それと 同時に再び男の精液が
西野の膣内へと 大量に注がれた…

突然　ホールの照明が暗くなった

そして　何やら　店の女の子による
マイクパフォーマンスらしきものが始まった

「これから　恒例のダウンタイムに入るよ～！」

「お待ちかね　お店の人気ガールズのご登場だよ～
みんなぁ　いっぱい　い～っぱい　射精しちゃってねぇ～っ♡」

「それではぁ　ダウンタイムスタート～っ♡」

マイクパフォーマンスが終わると
徐々に照明が明るくなってきた
そして　ミラーボールが回りだし
店内は赤やピンクなどに　ライトアップされる

ホールの奥にある　カーテンが開いた
暗くて　よく見えないが
奥から女の達が出てきたようだ

と　同時に　客から歓声が沸き上がった

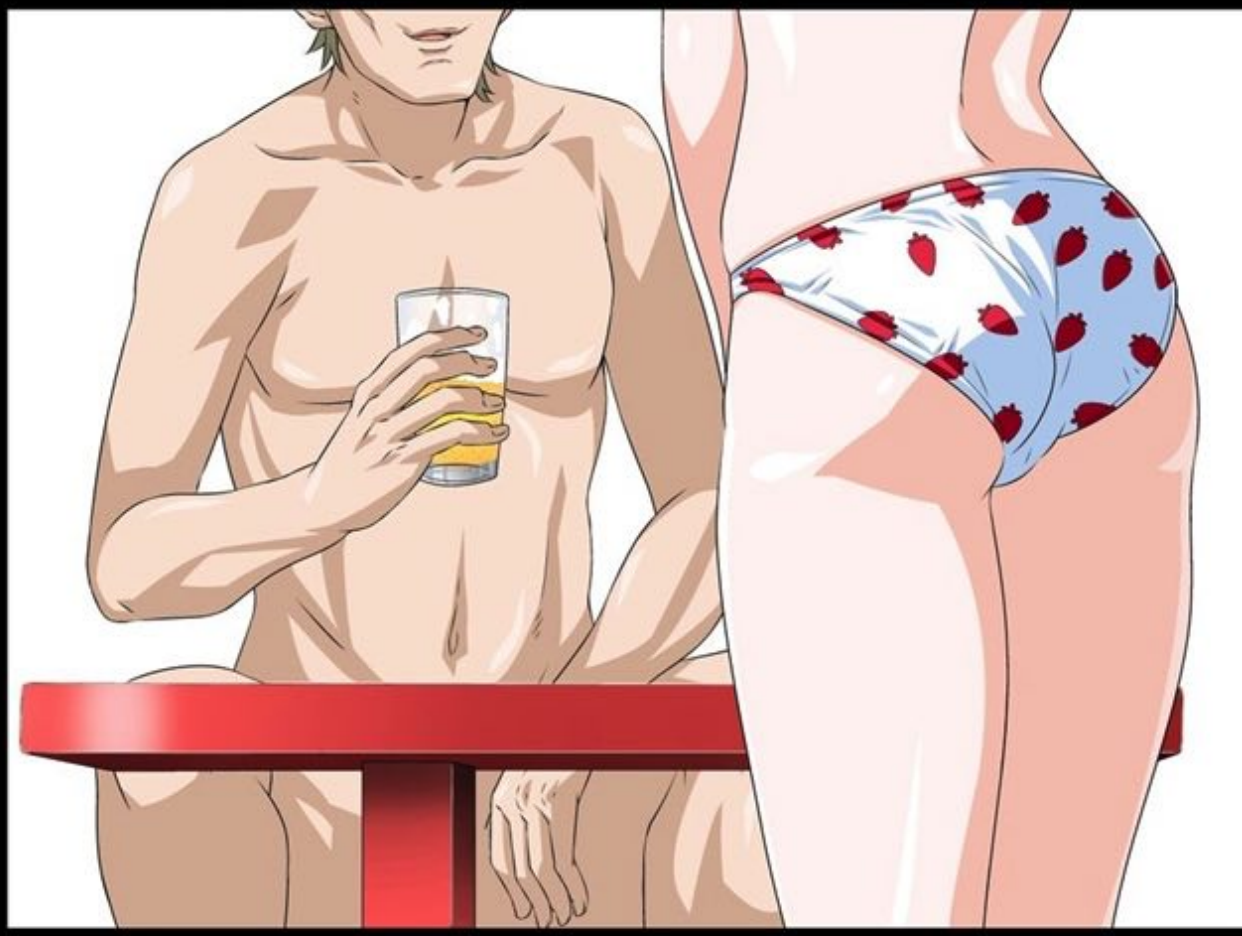
店のライトが女の子達を照らすと
そこにいたのは
なんと…っ

ウオオオオオオッ

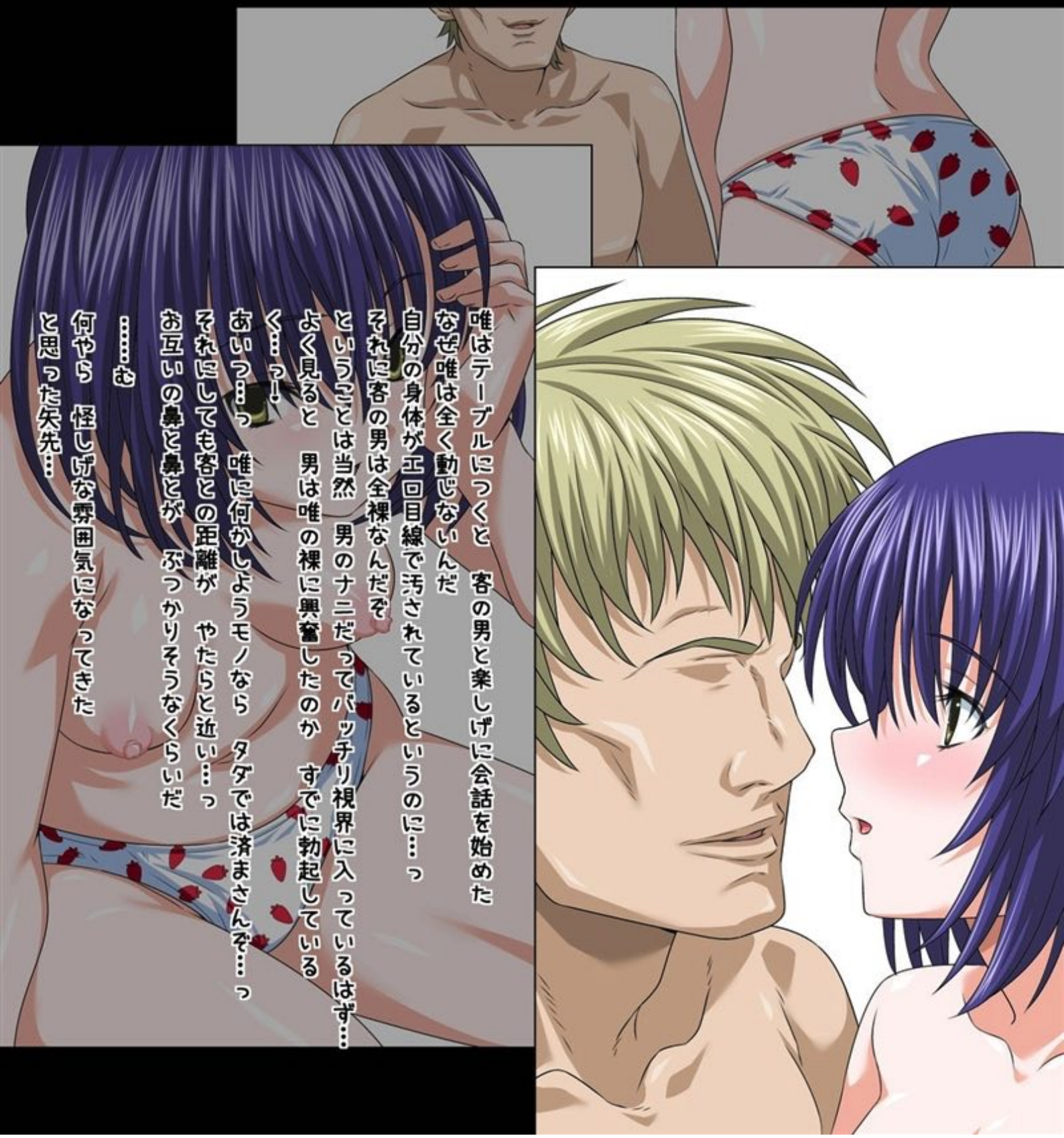
「と　東城…っ！」
「それに　さっ　さっき…っ！」
「ゆ　唯まで…っ！」
たぷん♡
ぼるん♡
ぷるっ♡

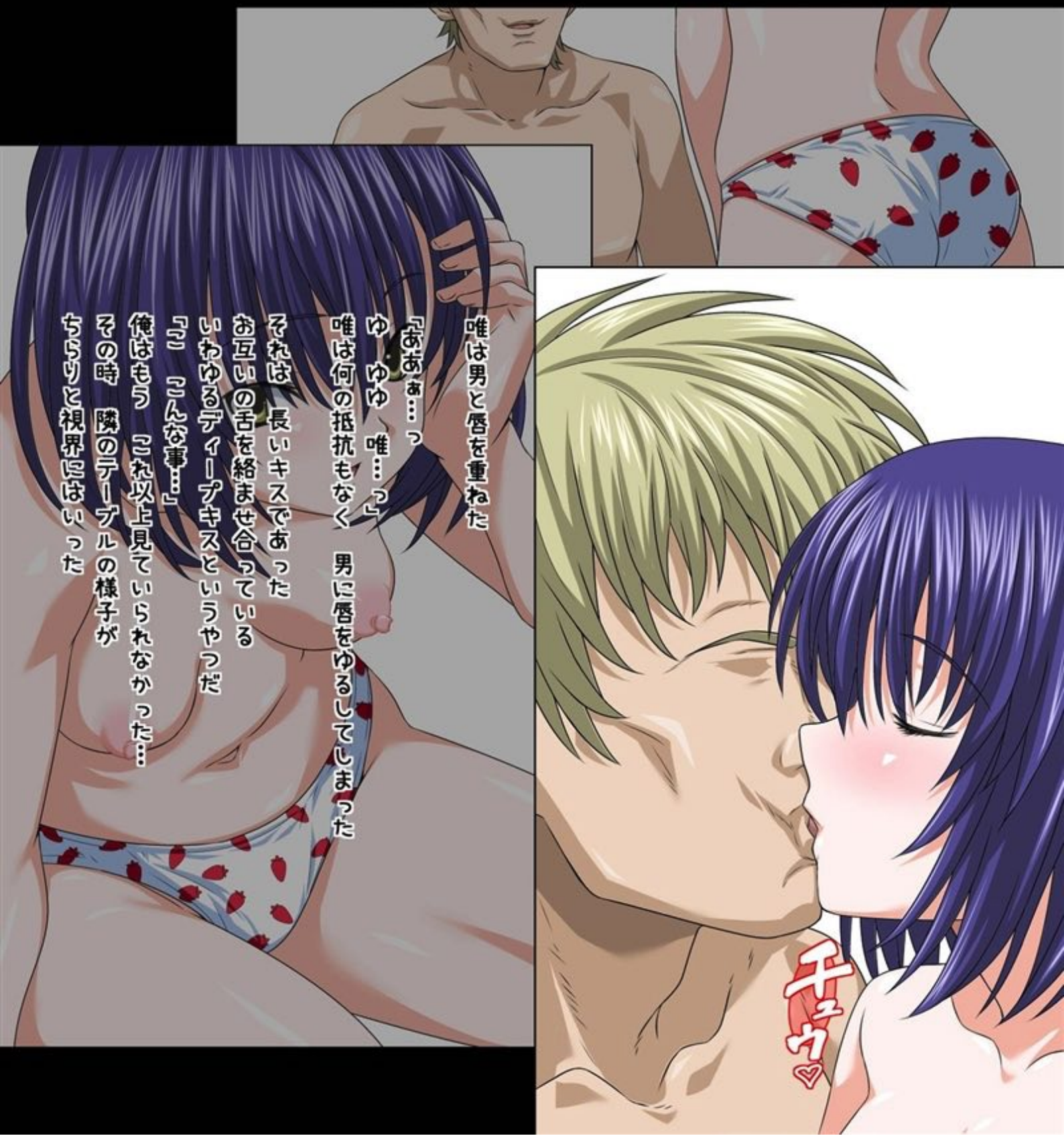
な　何なんだよこれは…
西野だけじゃなく
みんな　この店で働いていたのかよ…
い　一体いつから…
みんな　身に付けているのは
西野同様　いちごぱんつのみ…
大勢の男共の前で　自分の裸を魅せつけている…
俺は彼女達の裸をこんなに　はっきりと
見たのは初めてだった…
不謹慎かもしれないが
俺のアソコはすでに　ギンギンに勃起していた…

客の男達は　みなすでに全裸になっている
そして各テーブルに　一人ずつ女の子がつく
客はマンツーマンで　女の子からサービスをうける事ができるようだ
ちなみに　女の子達が着用しているのは全員　いちごぱんつのみだ



二つ先のテーブルで
唯が接客をしているのがみえる
髪をかき上げながら　ソファへと
腰を下ろす
その一連の仕草が実に女性らしく思えた
あの　色気など微塵もなかった唯が
ここまで変わるなんて…
俺の知らない所で　一体
どのような経験をしてきたのだろう…


唯はテーブルにつくと　客の男と楽しげに会話を始めた
なぜ唯は全く動じないんだ
自分の身体が正口目線で汚されているというのに…っ
それに客の男は全裸なんだぞ
ということは当然　男のナニだってバッチリ視界に入っているはず…
よく見ると　男は唯の裸に興奮したのか　すでに勃起している
く…っ!
あいつ…っ　唯に何かしようモノなら　タダでは済まさんぞ…っ
それにしても客との距離が　やたらと近い…っ
お互いの鼻と鼻とが　ぶっかりそうなくらいだ
……む
何やら　怪しげな雰囲気になってきた
と思った矢先…


唯は男と唇を重ねた
「ああぁ…っ
ゆ ゆゆ 唯…っ」
唯は何の抵抗もなく 男に唇をゆるしてしまった
それは 長いキスであった
お互いの舌を絡ませ合っている
いわゆるディープキスというやつだ
「こ こんな事…」
俺はもう これ以上見ていられなかった…
その時 隣のテーブルの様子が
ちらりと視界にはいった
チュウ♡

チュルチュル♡

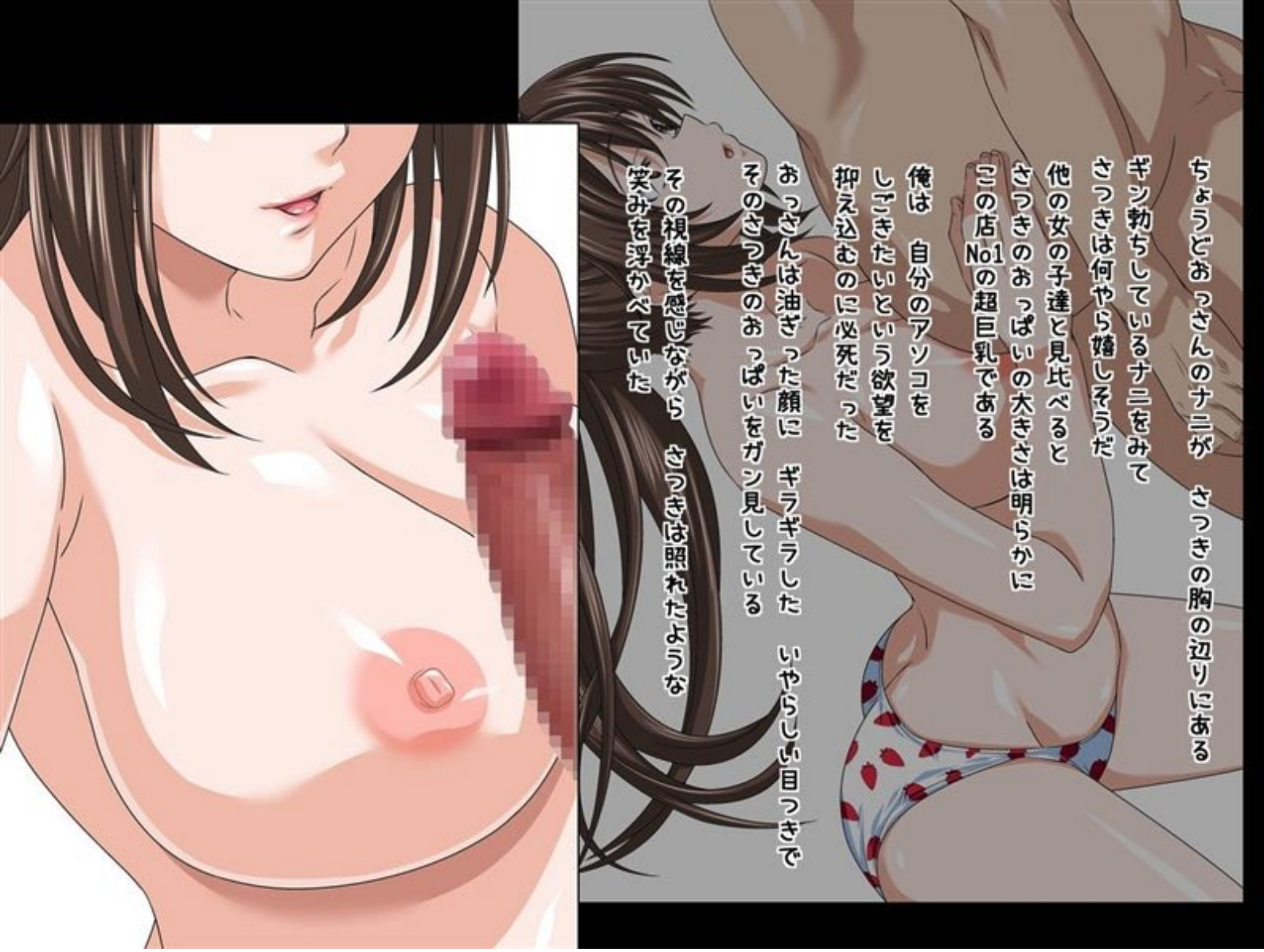
「さっ　さつきぃ…っ！」
さつきが　頭の禿げたおっさんと
熱いキスを交わしていた
「あ　あぁぁ…」
さつきは強気で　がさつな性格だが
こと恋愛に関しては
誰よりも真剣で　熱い女の子だった…
そんなさつきが
あんなメタボな中年のおっさんと…

俺の大切な女の子が　一人…また一人と
汚されていく…
「あっ　そうだ…っ
東城…っ　東城は…っ」
あの男が苦手な東城なら
きっと大丈夫な筈だ…っ
俺は　東城の姿を探した…っ
「……いたっ　とうじょ…っ！」
俺は言葉を失った…

東城は　男の上にまたがり
この店の　どの女の子達よりも
エロくて　大胆なキスをしていた…
しかも　東城が率先して
男とのベロチューをあじわっているようにみえる…
恋愛が苦手で　男嫌いの
あの東城が…
いつの間にか　男好きに…？
もう…　男なら誰でもいいのかよ…
レロレロ♡
その時　俺は悟ってしまった…
これらの光景は
これから始まるであろう宴の余興に過ぎないと…

さっきは　おっさんとのディープキスを終えると
ちょこんと　その場に座り込んだ

俺は　見てはいけないと思いつつも
さっきの見事な　ボディライン
そしてぷりんっとしたおしりや　太ももに
興奮して　思わず魅入ってしまっていた


ちょうどおっさんのナニが　さっきの胸の辺りにある
ギン勃ちしているナニをみて
さっきは何やら嬉しそうだ
他の女の子達と見比べると
さっきのおっぱいの大きさは明らかに
この店No1の超巨乳である
俺は　自分のアソコを
しごきたいという欲望を
抑え込むのに必死だった
おっさんは油ぎった顔に　ギラギラした　いやらしい目つきで
そのさっきのおっぱいをガン見している
その視線を感じながら　さっきは照れたような
笑みを浮かべていた

ぱふっ♡

そんな効果音が似合いそうな
さっきの柔らかくて
重量感のあるおっぱいが
おっさんのナニを包み込んだ

「…くっ！」

思わず　羨ましいと思ってしまった　自分がそこにいた…

いや男であればそう思うのは　至極当然の事だ
本当に何て大きさだ…

「ああ…っ　あのおっぱいを　揉みまくりたい…っ」

そんな　サイテーな言葉を口に　してしまうほど
さっきのおっぱいには　魅力と破壊力があった

「うおぉ…っ！」
ものすごい光景が　目に飛び込んできた
さっきに魅入っていて　気づかなかったが
女の子達が　横一列に並んで
パイズリのサービスをしていた
女の子達は　客のナニを
自らのおっぱいで挟み　懸命にしごいている
恋人　同級生　幼馴染　みな
俺の大切な女の子達…
俺の守るべき存在…
むにゅ♡
むにゅ♡
むにゅ♡
むにゅ♡
しかし　みんなの淫乱な姿を見せられ
とうとう俺の理性は　崩壊してしまった
気がつくと俺は　ズボンを下ろし
フル勃起した　ナニをしごきまくっていた

店内のBGMに合わせて
女の子達の動きが　激しくなる
客の男共は　体をのけぞらし
ナニが　蒲けてしまうような
マシュマロ天国をあじわっている
女の子達は　そんな男共の反応を
楽しむように
きゃ　きゃっと笑いながら
ナニを刺激しまくっている
お　俺のアソコも扶んでくれぇ
そんな　虚しい願いを　祈りつつ
俺は　一人オナニーを続けていた
むにゅ♡
むにゅ♡
むにゅ♡
むにゅ♡
むにゅ♡
むにゅ♡

さらに　アップテンポな曲に合わせ
男共をいかせにかかる
ナニ全体を包み込み
激しく搾りあげる
ぷにゅんっ　ぱにゅんっという
おっぱいの奏でる　Hな効果音が
俺のリビドーをさらに刺激する
少しでも長く　このおっぱい天国を
味わいたいであろう男共も　さすがにもう
限界のようだ
膝がガクガクと震え
今にも　発射しそうな気配だ
「そして　俺も　も　もう限界だ…っ
う…っ　で　出る…っ」
もにゅ♡
むにゅ♡
もにゅ♡
もにゅ♡
たぷん♡
たぽっ♡
たぷん♡
たぽっ♡
たぽっ♡
たぷっ♡

客の男共がいくのと　同時に俺も
欲望の塊を　店内にぶちまけた

「おぉっ！　あぁっ！　う…っ！」
アドレナリンが大量放出しまくっている俺は
興奮を抑えきれず　情けない声を
あげながら射精してしまった

ドピュッ
ドピュッ
ドプッ
ブビュッ

頭から　どっぷりと
精液を被った女の子達の姿は
妙にいやらしい雰囲気を漂わせている
女の子達は　男をいかせた
満足感と支配力に　酔いしれていた
そしてパイズリタイムが終わると
女の子達は　次のサービスタイムへと移る準備を始めた
ハア…
ハア…
ハア…
ハア…
ハア…
ハア…
ハア…
ハア…
ぴくん
ぴくん
ぴくん
ぴくん
ぴくん
ぴくん
ぴくん
ぴくん
とろ～ん

女の子達が　精液まみれになったナニと
自分の身体を綺麗に拭き取ると
今度は　亀頭をレロレロと舐め始めた

どうやら　フェラタイムが始まったようだ

亀頭をやさしく　舐め回しながら
竿の裏側もしっかりと　刺激している
東城はまるで　彼氏のナニを
扱うかのように
丁寧にフェラをしていた～
客の男は　すっかり彼氏気取りで
色々と東城に要求している
ぺロ
ぺロ
ぺロ
ぺロ

周りの女の子達も
ナニの敏感な場所を把握
しているらしく
そのポイントを
うまく舌を使いながら
刺激している
そして何より　彼女達の上目づかいが
客の男共の　興奮をさらに煽りたてていた
彼女達と目を合わせながらの
フェラ…
考えただけでも
俺は昇天しそうだった
俺は
いったばかりのアソコを
再びしごき始めた
ペロ♡
ペロ♡
ペロ♡
レロ♡
レロ♡
レロ♡
チボ♡
チボ♡
チボ♡

客の男共は
彼女達の愛情あふる
奉仕に男べを
くすぐられ いつもより
敏感になっているようで
すでに射精寸前
まできているようだった
チュパ♡チュプ♡
チュプ♡
チュプ♡
チュプ♡
チュパ♡
それもそうだ
こんな 若くてかわいい子達に
あんな事されたら
我慢なんてできる客もない
チュル♡
チュル♡
チュル♡
チュル♡
チュル♡
チュル♡
俺のアソコを搾る手が
無意識に早くなる
そして
チュプ♡
チュプ♡
チュプ♡
チュパ♡
チュプ♡

どぷぷぷうぅっ！
ドプゥゥ
限界点を越えた男共はみな
一斉に射精した
そして　俺も
溢れんばかりの精液
を発射させる
ドピュッ
ブピュッ

男共が　最後の一滴まで
精液を出し切るまで
彼女達は
奉仕をやめない
ビュルルッ
ビュビュッ
それは　少しでも長く
射精の快感を
味わってほしいという
彼女達の想いなのだろう
ビュビュッ
ビュイッ
彼女達は　すでに一人前の
風俗嬢になっていたようだ
ビュルルルッ
ビュビュ

彼女達は　男共の
精液をしぼりとり終えると
悦に入っていた
うっとり…
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ

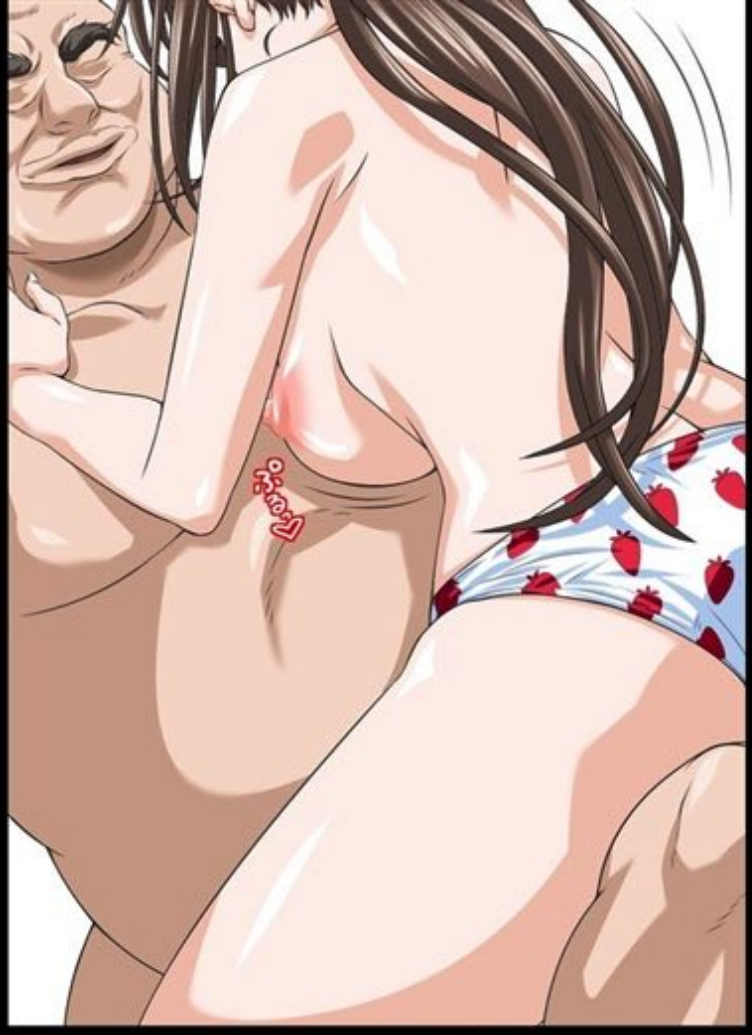
そして
店内に再び マイクパフォーマンスが入った

「みんな〜 たくさん 出してたね〜♡
気持ちよかった〜？」

ほっ これで ようやく
終わったようだ…
俺は 彼女達が風俗嬢になっていたという事実よりも
今はとにかく 今すぐ西野とHがしたいという
想いで頭がいっぱいになっていた

「まだまだ 終わりじゃないよ〜♡
続いては 当店一番人気のイベント
ゴールデンタイムだよ〜♡
みんな〜 女の子達と一緒に
いっぱい いっぱい ハッスルしちゃってね〜♡」

え ま まだつづくのかよ…
それに ゴ ゴールデンタイムって…？



つかさが勃起しているメタボのおっさんに　またがり始めた

え　まさか…

俺はこの　時点でゴールデンタイムの内容を
理解してしまった

ムチッ
つかさは女の子の
大切な所を
自ら おっさんのナニに
押し当てた

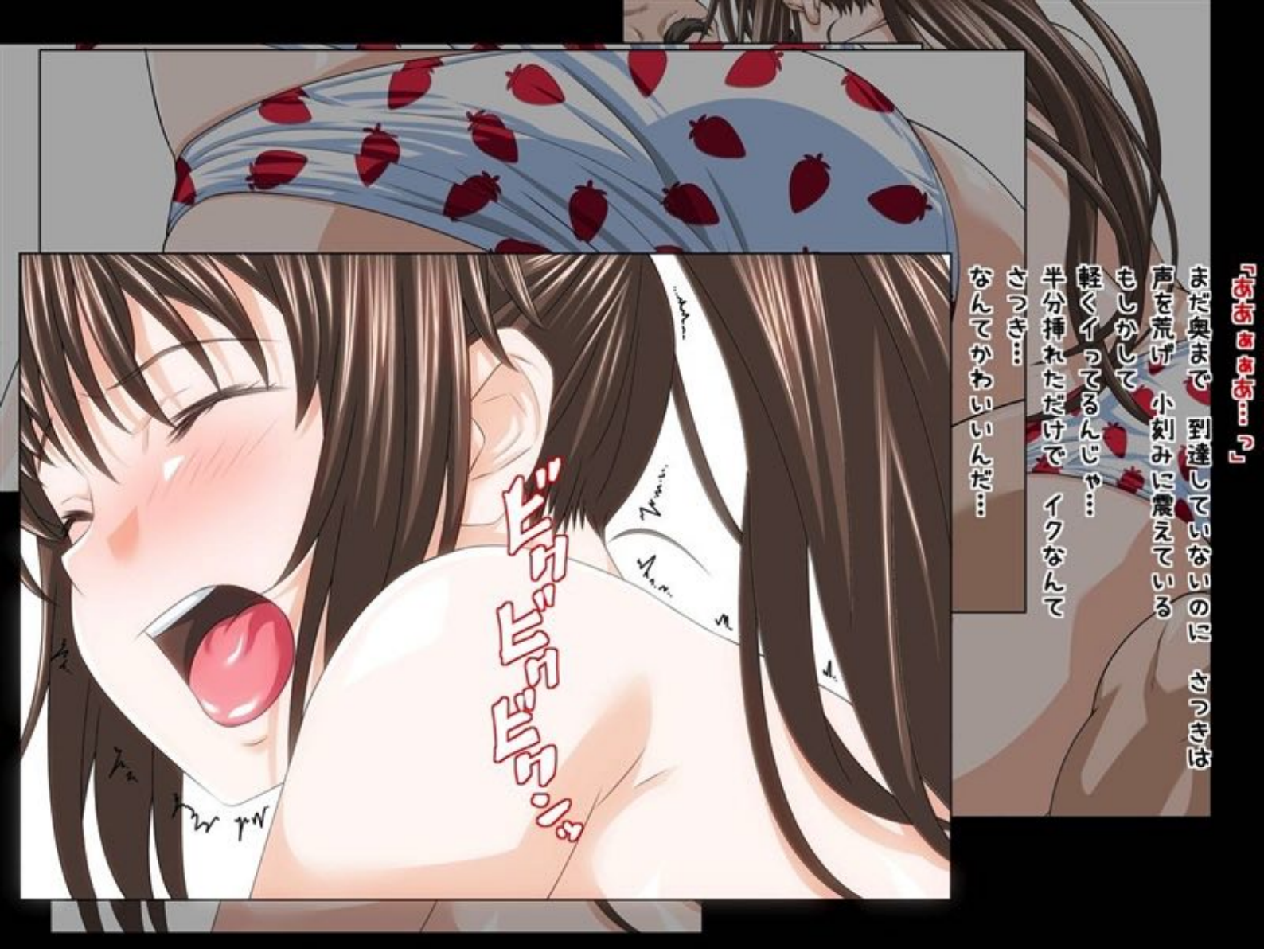
つかさの　身体はビクンっと
大きく反応し
吐息のような声を漏らす

ちょっと触れただけであの反応…
ひょっとして　つかさって
感じやすいのか…？
俺は　そんなつかさの
姿に興奮を覚えてしまった
そして　この続きが見たいと
思ってしまった
お　俺は　なんて最低の男なんだ…

ビクッ

つかさは　さらに奥まで
おっさんのナニを咥えこんでいく
奥に挿入するにつれ
さっきの反応も　大きくなっていく

ドク…
ドク…
ブチュチュチュ


「あぁぁぁぁ…っ」
まだ奥まで　到達していないのに　さっきは
声を荒げ　小刻みに震えている
もしかして
軽くイってるんじゃ…
半分挿れただけで　イクなんて
さっき…
なんてかわいいんだ…
ドクドクドク…

東城と唯もまた
客の男にまたがり　今まさに
挿入しようとしていた
俺にとって大切な女の子達が　ヤリちん野郎共に
性処理の道具として
つかわれている…
本来なら　目を背けたい惨状なのだが
しかし　俺は自らの性欲を抑える事ができず
彼女達の裸を　オカズにひたすら
オナニーを貪っていた
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ズチュ
ブチュ
ブチュ

男のナニが　奥まで到達したようだ
彼女達は　今日知り合ったばかりの
男に挿入まで許してしまったのだ
処女だと信じていた彼女達は
とっくの昔に　経験済みだったという事か
彼女達の経験人数は　軽く二桁は
越えているであろう…
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ズリュリュ
ブチュチュチュ
ブリュリュリュ

店内のあちらこちらで
客と女の子達とのHが始まった
男共は　それぞれ好き勝手に動き
女の子の身体を堪能している
女の子達は ひたすら　突かれるのみで
男が満足するまで
挿入させてあげるようだ
ズチュッ
ブチュッ
ズチュッ
ブチュッ
ズチュッ
ブチュッ
ズチュッ
ブチュッ
ズチュッ
ブチュッ

そんな彼女達の気持ちを
知らねえよと　いわんばかりに
男共は自分が　気持ちよくなりたいがためだけの
ジコチューHを続けていた

しかし　彼女達が
攻められれば　攻められるほど
乱れれば　乱れるほどに　俺は興奮が増していった

つかさは　すでに
おっさんちんぽにハマったようで
おっさんと一緒に　Hを堪能し始めていた

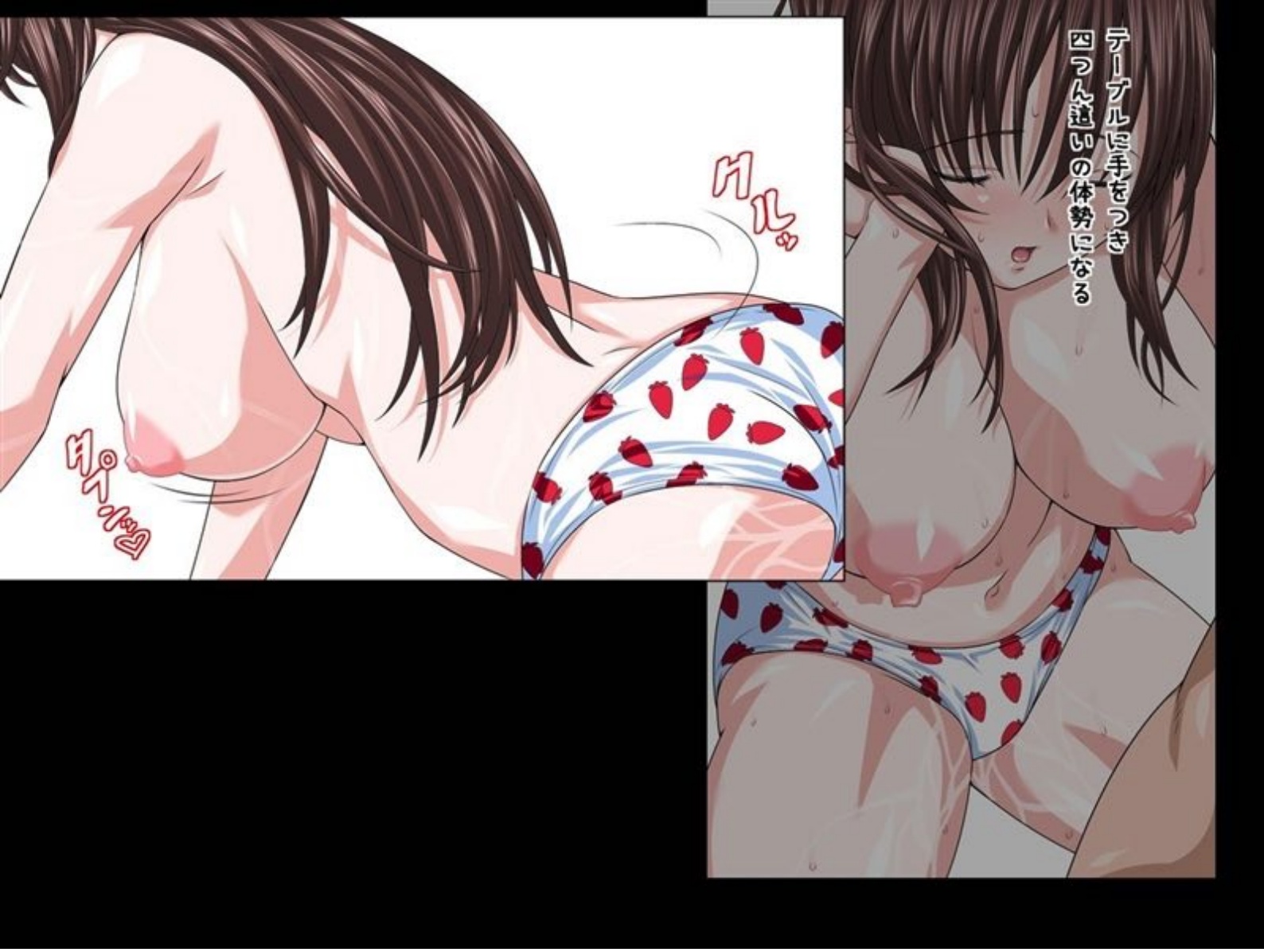
女の子達が　ビクンっと身体を
震わせ　苦悶の表情を浮かべる
おそらく　膣内では
男共が射精しているのだろう
客の中で　誰一人として
外出しをするものはいない
男からすれば　オナホに乳を
使うやつはいないだろうという理屈なんだろう
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ブピュ
ドプッ
ドピュ

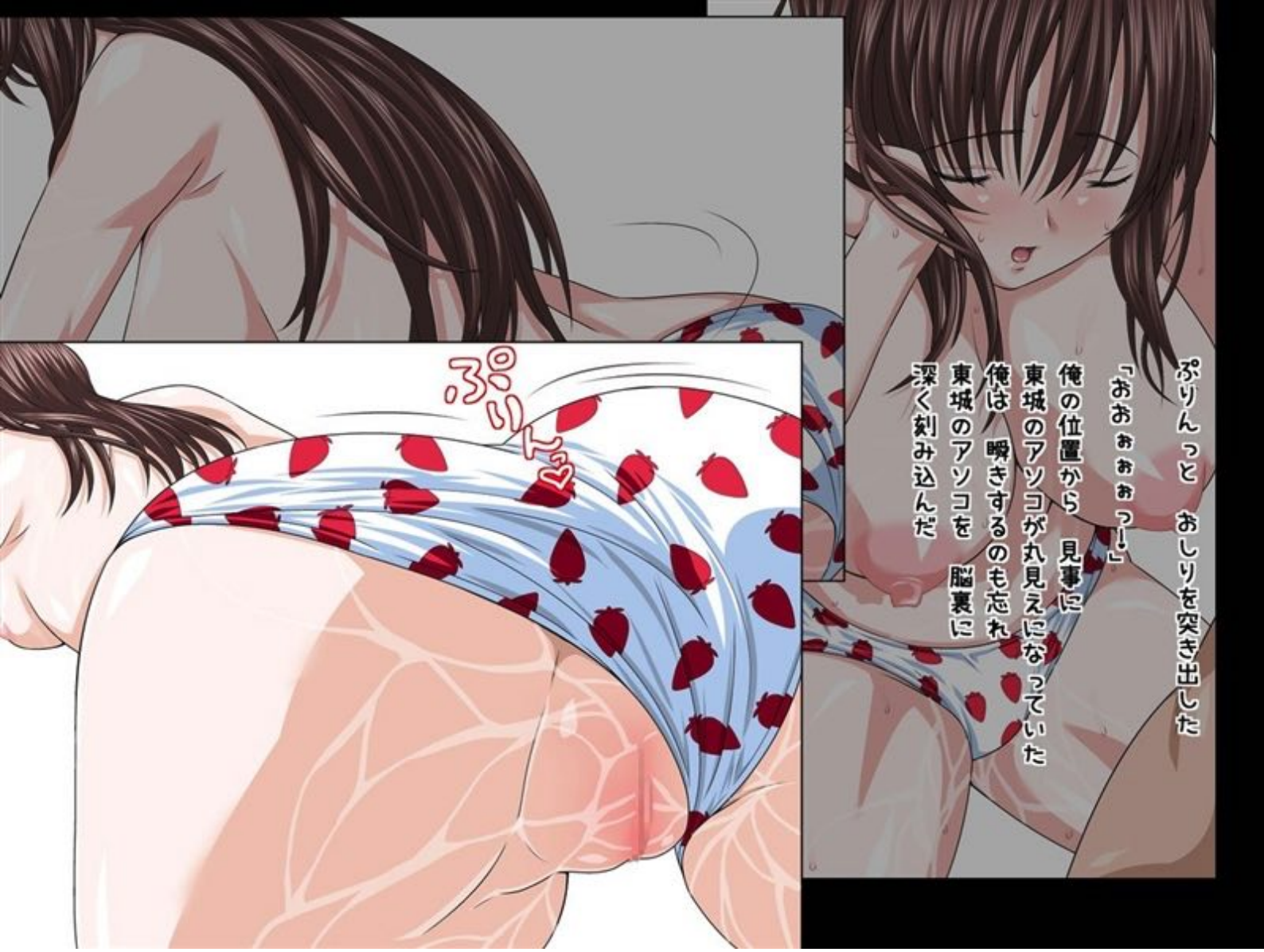
女の子達が　小刻みに震えている
男共はまだ　挿入をやめようとしない
男共は　自分の精液を全て
彼女達の　膣内に放出するつもりなのだ
それが　男にとって最も
快感で悦楽に浸る事ができるからであろう
ビュルビュッビュッ
ブピュッビュッ
ビュッビュッ

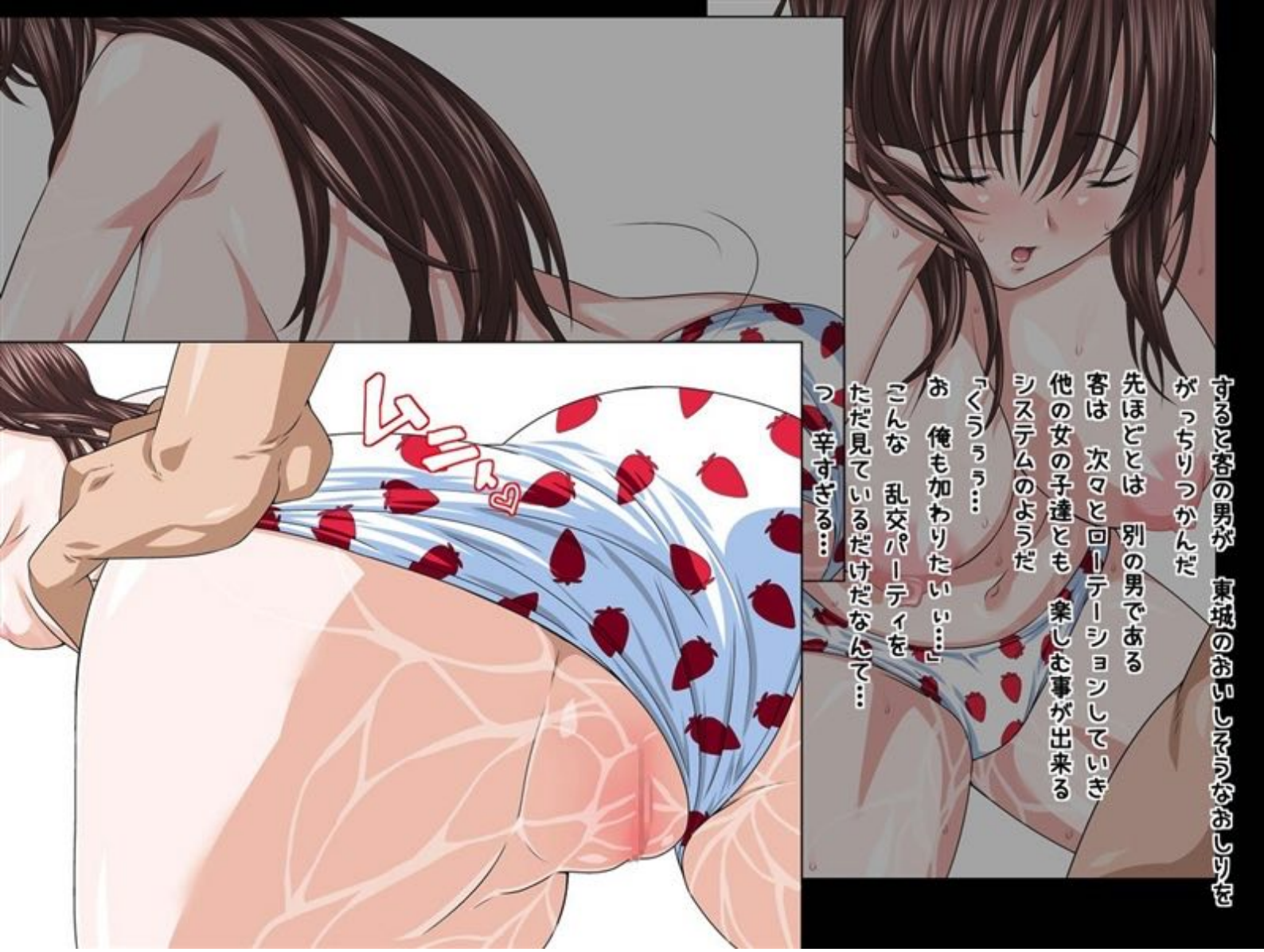
ようやく　男共の
射精が終わったようだ
彼女達の　膣内には
溢れんばかりの精液の湖ができているに違いない
頼むから　妊娠だけは
しないでくれ…
しかし　こんな事を続けていたら　いつか…
いや…　ひょっとしたら
もうすでに…
その可能性は十分にある…
ゲプッ
ゲポッ
ゲプッ
ゲプッ
ゲプッ

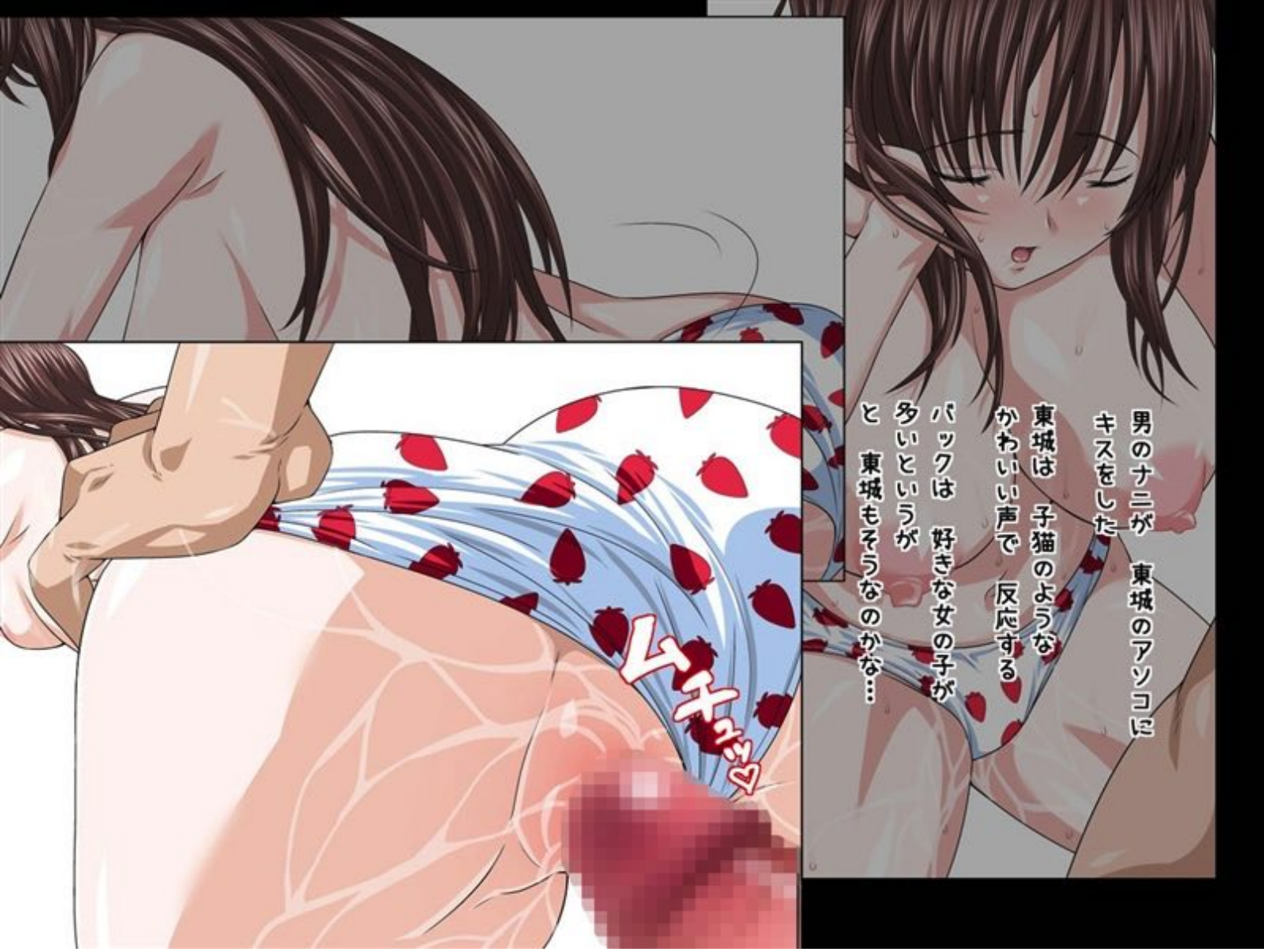
行為を終えた東城は
ゆっくりと立ち上がる

まだ　アソコにナニの余韻が　残っているのか
甘い声がかすかに聞こえる


テーブルに手をつき
四つん這いの体勢になる
ケル
ケイ


ぷりんっと　おしりを突き出した
「おおぉぉぉっ！」
俺の位置から　見事に
東城のアソコが丸見えになっていた
俺は　瞬きするのも忘れ
東城のアソコを　脳裏に
深く刻み込んだ
ぷりんっ♡


すると客の男が　東城のおいしそうなおしりを
がっちりつかんだ
先ほどとは　別の男である
客は　次々とローテーションしていき
他の女の子達とも　楽しむ事が出来る
システムのようだ
「くうぅぅ…
お　俺も加わりたいぃ…」
こんな　乱交パーティを
ただ見ているだけだなんて…
つ　辛すぎる…
レロォ


男のナニが　東城のアソコに
キスをした
東城は　子猫のような
かわいい声で　反応する
バックは　好きな女の子が
多いというが
と　東城もそうなのかな…
ムチュ♡

女の子達は 全員バックで
客とHをするようだ
これだけの美少女達が
全員同時に犯される…
男なら 誰もが一度は思い描く
夢の光景だ
しかし そこに
加わる事のできない俺にとっては
生き地獄の何物でもなかった
もう 彼女達が どれだけ
犯されようが
膣内出しされようが 構わない
俺は彼女達の中に 挿れたくて
堪らないんだ…っ
挿れたくて

ナニが奥まで
挿入され 再び
乱交パーティが始まった
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ブチュッ
ブチュッ
ドチュッ
ドチュッ

この店では　Hの時
必ず客側に　主導権があるようで
女の子達は　みんな
客にされるがまま状態になっていた
四つん這いになった事で
おっぱいがさらに強調され
揺れ方が半端ではない
男共は　そのおっぱいを見る事により
脳内が刺激を受け　より発情する
発情した男共は　獣のように
ただひたすら彼女達を　犯しまくっていた
ドチュッ
ズチュッ
ブチュッ
ズリュッ
ブチュッ
ドチュッ
ズチュッ
ズリュッ
ズチュッ
ドチュッ
ブリュッ
ぷるんぷるん
たぷんたぷん

とにかく 容赦なく
突くっ 突くっ 突くっ!
本当に彼女達が 壊れてしまうんじゃ
ないかと思うくらい
男共は 暴れ狂いまくる
そんな 男共の欲望の全てを
女の子達は
ひたすらアソコで受け止める
店内には 叫びに似た彼女達の
喘ぎ声が 響き渡っていた
ぼるるん♡
たぷん♡

たっぷりと　彼女達を堪能した男共は
絶頂を迎えると
満足気に種付けを初めた
彼女達は　一斉に
悲鳴のような　悦びの声をあげる
ドピッ
ドピッ
ドピッ
ブビュッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

彼女達は身体を震わせ
全身で女の悦びを感じていた
さっきと東城はよほど
気持ちがよかったのか
甘えるような表情で
自分の相手の男の事を
見つめていた
ビュビュッ
ブビビュー
ビュー
ドビュッ
ブピュッ
ドピッ
ビュビュッ
ビュッ
ビクッ

射精を終えた男達が
ナニを引き抜くと
女の子達のアソコから
大量の　精液が
勢いよく溢れだした
女の子のアソコは　ぱくぱくと
開いたり　閉じたりを
繰り返している
さすがに　もう
彼女達も限界のようだ
これ以上続けたら
本当に壊れかねない
ビュビュ
ビューッ
ブビューッ
ビュー

西野の相手だった男は
やたらとデカちんであった

西野はアソコを
その極太のナニで
ごりごりと
攻められまくられ
失神寸前の所であった

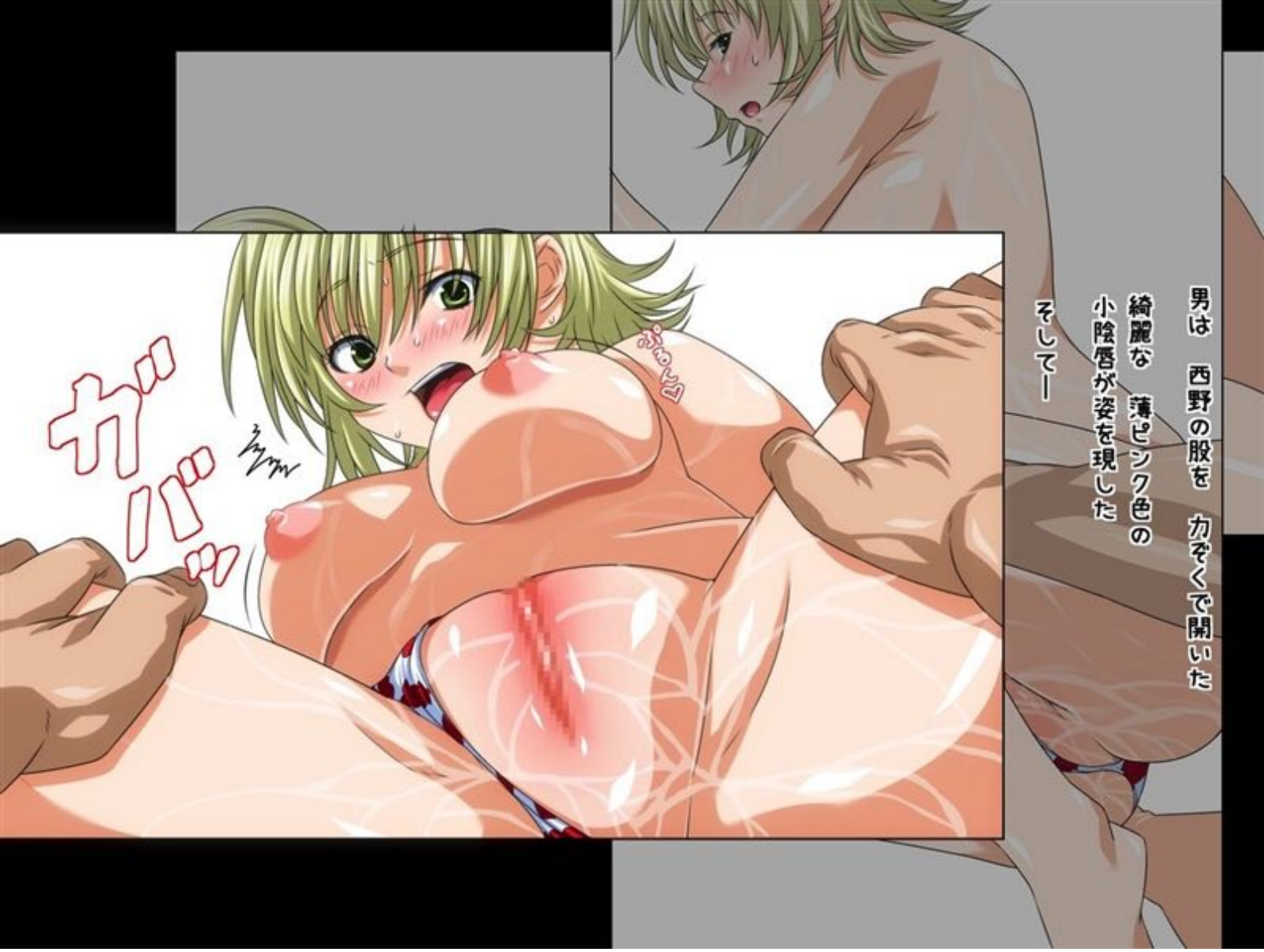
そのためHが
終わったあとでも身体に力が
入らない様子で
ひとりでは
起き上がれないようだ

ボーイは　何を
やってるんだ
早く西野を
助けてやってくれ

西野の元へ　一人の客が寄ってきた
西野は　それに気づき
何とか　身体の向きを変える

客の男が　西野の
太ももに手をかける

「あ　あいつ　まさか…っ」
俺は　男の下半身に視線を向けた
すると男のナニは　ありえないほどのデカちんぽで
すでに臨戦態勢に入っていた


男は　西野の股を　力ぞくで開いた
綺麗な　薄ピンク色の
小陰唇が姿を現した
そしてー
ガバッ
ぷるん

床に　女の子達が並べられ
再び乱交パーティーが始まった
男達は入店したばかりの客で
元気と性欲があり余っているようで
いきなり　挿入し出した
ビクッ
ビクッ
ズプププ…
ビクッ
ビクッ
ズプププ…
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ジュプププ…
ズブブブブ…

彼女達のアソコは 今かなり敏感になっている
しかし 客の男達中は おかまいなしに
フル勃起したナニをぶち込み
盛りのついた犬の如く 腰を振りまくっている
店内は 女の子達の喘ぎ声が
BGMの変わりとなり
それが男達中の精力を かきたてていた
ズッ
ジュプッ
ズチュッ
ズプッ
ジュプッ
ズチュッ
ズプッ
ジュプッ
ズチュッ
ズプッ
ぷるんっ
ぷるっ
ビクッ

早く射精したい 一べの男連中は
腰が砕けんばかりに
がむしゃらに動き続ける
女の子達の精神はすでに
壊れ始めていた
限界を越え
ドチュッ
ズチュッ
ズプッ
ビクッ
ぷるるんっ♡
ぶるるんっ♡
ばるるんっ♡
たぷたぷ
ぷるるるっ
ぷるるんっ
ぷるるんっ
ぷるるん

ドプッ
ビクンッ
ビクンッ
ドピュッ
ビクンッ
ドピュッ
ビクンッ
ドピュッ
この店ではこれがセオリーなのか
男達中は 当たり前のように
膣内に 射精をした
一日に何人もの客を相手にしている
女の子達の膣内は
複数の男の精液が混ざり合っている事だろう

乱交パーティーは
その後も続いた…
いつになったら　彼女達は
解放されるのか
パーティー終盤の方では
彼女達は　完全にラリってしまっているのか
まるで人形のように固まり
男のナニを
あへあへ言いながら
咥えこんでいた…

ドンドン新密度が…

唱える「ムピーートマー地獄ふつ
ものすごい勢いで新密度が上がっちゃいました…

学校　図書室の隅の隅ンム
ンちゃン地区リ也　ゆいこちゃこちゃいた

学校出口の大く　駆け出ンム
「待　図書ー

西野は客の男と　寄り添いながら歩いていた
それは　どこからどう見てもカップルにしか見えない
俺は　その雰囲気を察知し
声をかける事ができなかった
そして二人は夜の
大人の街へと消えていった…
俺は　その後ろ姿を　見届けると
一人寂しく帰路に就いた…

その後の　俺と西野の関係は―
いや　今は語るまい…
END

私のHな所たくさん
みせちゃうから
みんなも いっぱ～い
出しちゃってね♡